［投稿論文］

# エスノメソドロジーとテクストデータ

岡沢　亮*

本稿の目的は，テクストデータを用いるエスノメソドロジーの方針と取り組むべき課題をめぐる方法論的議論を進展させることである．まずテクストのエスノメソドロジーの基本方針が，テクストを社会現象の表象として扱うのではなく，テクストにおいていかなる活動がいかなる概念連関に依拠して行われているのかを分析することだと述べる．次に，テクストを分析する際の資源としての受け手の反応（の不在）をめぐり会話分析から寄せられた批判に応答し，テクストの分析可能性を擁護する．その上で，Goffman の参与枠組のアイデアとそれに対する会話分析の批判的検討を参照し，書き手と読み手がテクストをめぐる参与枠組を形成する方法を解明することが興味深い課題になると論じる．またその課題に取り組むにあたり，テクストを書く／読む実践の制約かつ資源となるインターフェイスへの着目の重要性を主張する．以上を踏まえ，ウェブ上の映画作品レビューとそれに付されたコメントの具体的分析を行うことにより，テクストの参与枠組を形成する方法の分析が当のテクストの活動としての理解可能性の解明に資すること，そしてその分析においてテクストを書く／読む際のインターフェイスへの着目が有効であることを例証する．最後に，本稿の議論がエスノメソドロジーと会話分析の関係の再考や，テクストデータを用いる社会学一般をめぐる方法論的議論に寄与することを示唆する．

キーワード：エスノメソドロジー，会話分析，テクスト

## 1　序　　論

エスノメソドロジー（EM）は会話分析（CA）との密接な関係ゆえに，主に発話からなる相互行為を録音・録画データの使用に基づき分析するものとみなされがちである．その一方で，EM の古典である「子供の物語の分析可能性」（Sacks 1972）も含め，今日に至るまでの EM 研究においては，新聞や雑誌等のメディア・テクスト（Eglin and Hester 2003; 酒井 2010; 團 2013; 山﨑 2015; 小川 2016），学術的・科学的テクスト（Watson 2009; 河村 2013），判決文（小宮 2011; 岡沢

＊ 明治学院大学　boiledend0320@gmail.com

2017），教科書（Sharrock and Ikeya 2000）あるいは詩と批評（Livingston 1995）などが扱われてきた．

テクストへの着目は，社会成員の実践の方法を解明するという EM の目標に鑑みて，決して不可解ではない．私たちは様々なテクストを用いて社会生活を送っており，そこには EM 研究の重要かつ豊かな対象がある．しかし，CA と比べると，テクストデータを用いる EM 研究の分析方針と取り組むべき課題をめぐる方法論的議論が順調に蓄積されてきたとは言い難い．本稿が目指すのはこうした議論の進展である．

そのために，本稿の射程を明確にしておきたい．まず本稿はテクストの中でも主に文字情報や文章によって構成されているものを扱う．EM 研究の中では，図像・画像を含むテクストも取り上げられてきた．たとえばマンガ（是永 2017），野鳥観察図鑑（Law and Lynch 1988），手書きの地図（Psathas 1979）などである．こうしたテクストも EM 研究の重要な対象ではあるが，本稿では図像・画像の分析方法論ではなく，主として文章からなるテクストに焦点を絞る[1)]．

また EM の立場からテクストデータを用いるにあたっては，書き手によるテクストの読まれ方への志向に焦点化することが重要になる．EM の創始者の H. Garfinkel（1967）は病院のカルテを分析する際に，それが病院の医療活動という特定の文脈で読まれ使われること，そして書き手がその読まれ方や使われ方に志向してカルテを書くことに着目している．これを踏まえ本稿も，書き手がテクストの読まれ方に志向してテクストをデザインする仕方の解明に資する分析方法論を示そうとする．なおこうした分析にあたっては，当該のテクストデータに加えて実際にテクストが書かれ読まれる場面（たとえば職場で書類が使われる場面）を記録したビデオデータ等を用いることも考えられる．しかし本稿はテクストデータの分析方法論を示そうとするものであり，テクストデータとビデオデータの併用可能性や，テクストを読み／書く場面のビデオデータの分析方法論は本稿の射程を超える．

さて，こうした書き手によるテクストの読まれ方への志向は，書き手がテクストを特定の活動としてデザインする仕方に現れていると考えられる．そこで次節ではまず，活動としてのテクストという視点について論じる．

## 2　活動としてのテクストと「概念分析の社会学」

テクストデータを用いる EM の代表的な論者である R. Watson（2009）と E. Livingston（1995）[2)]はテクストを行為や活動としてとらえている．Watson（2009: 7）は「私たちは，テクストが社会的行為，ローカルで状況づけられた種類の行為を果たしているとみなす」と述べ，各々のテクストが何を行っているのかを分析することを提唱する．たとえば私たちの社会には新聞・判決文・論文など様々な種類のテクストが存在しているが，それらはみな報道・法的決定の正当化・学術的知見の報告など特定の活動を行っている．こうした見方は，社会現象の表象としてテク

ストをとらえる見方と対照的である．テクストを他の社会現象について知るための資源ではなく，それ自体を活動としてとらえ研究の主題とする点にEMの特徴がある．

このようにテクストを分析しようとするとき，テクストを書く実践と読む実践に同時に焦点が当てられる．このテクストと読む実践・書く実践を切り離さずに扱う姿勢をよく表しているアイデアが，Livingston（1995: 14）の「テクスト／リーディングペア」である[3)]．このアイデアに基づけば，テクストには潜在的にそれがいかにして理解されるべきかに関する手がかりが含まれる．なぜなら，書き手は書く実践を通じて，その手がかりを埋め込む形でテクストを組織しているからだ．そして，読み手は読む実践を通じてその手がかりを見つけ，あるべき理解を顕在化する．このように読む実践は，一見曖昧にも読めるテクストをより合理的なものへと組織化する．

こうした観点から，テクストデータを用いるEMは書き手がいかにしてテクストをデザインし特定の活動を行っているのか，その活動の理解可能性はいかにして成立しているのかを問う．では，この問いに取り組むにあたって，どのように分析を進めるのか．

> 社会学的アプローチであるエスノメソドロジーは……読む活動を，文化に基礎づけられ，社会的に組織され，また何よりもローカルなものとして扱う．つまり，それらの活動は既定の集団や社会の成員に共有された文化的知識を基礎として行われるのであり，それらの集団や社会においては，そうした知識はしばしば人々（たとえば手紙の書き手と受け手）に共同的に使用される．（Watson 2009: 21）

読み手はテクストにおいて行われている活動を恣意的に理解するのではなく，書き手によるテクストのデザインに方向づけられながら，特定の方法に基づいた理解を行う．そして，この書き手と読み手に共有される公的な理解を基礎づけるのが「文化的知識」とされている．この「文化的知識」は非常に広い意味を持ちうるが，Watsonは「自然言語の一般的で常識的な特性」などの言葉を同様の意味で用いている（Watson 2009: 34）．Livingston（1995）もまた，読者が共同的に保持している知識に基づいて読む実践を行う点に注意している．その上で彼は「ここに奇妙さがある．というのも，読む実践は論理的でも非論理的でもないのである．それは端的にコミュニティが読むやり方なのだ」（Livingston 1995: 59）と述べている．この言明は，テクストを読む実践の合理性の独特なあり方を言い表している．すなわちテクストを読む実践は，純粋に形式論理的に正しい推論に基づき行われているわけではない一方で，恣意的に行われているわけでもない．むしろ私たちは，何らかの共有された知識を用いてテクストを読む実践を展開し，一定の合理性を持つテクストの理解に達するのである．

テクストやそれを読む実践には独特の合理性があり，それは必ずしも形式論理的に正しいわけではない推論に依拠しているという見方は，「概念分析の社会学」としてEMを捉える立場と親和的である．「概念分析の社会学」とは，EMを定式化するためのひとつの表現であり，人々の実践やその理解を可能にする規範的な概念連関が，人々の実践の分析の手がかりになることに注意を促すものだ（西阪 2001; 前田 2008; 酒井ほか編 2009）．

「規範的な概念連関」は，ある概念が他の特定の概念と結びつき，その概念連関が行為や出来事をいかに理解すべきかを定める点で規範的であることを指す．H. Sacks（1972）は「赤ちゃんが泣いたの．ママが抱っこしたの」という文章を取り上げ，これを赤ちゃんが泣いたから母親が抱っこしたという理由関係の下で理解できるのは，「母親」概念と「赤ちゃんの世話」概念が規範的に結びついているからだと論じた．言い換えれば，赤ちゃんが泣いたならば母親はあやすべきだという規範を参照することで，「赤ちゃんが泣いた」ことと「ママが抱っこした」ことを，単に時間的に連続した出来事としてのみならず，理由関係で繋がれた出来事だと理解できるのである．こうした規範的な概念連関は「概念の論理文法」（Coulter 1979＝1998）とも呼ばれ，形式論理的ではない論理性を有していると言える．

テクストを用いて行為や活動を組織し理解する際にも，私たちは概念連関に依拠している．WatsonやLivingstonが言及していたような，書く実践や読む実践の中で参照される知識は，形式論理的な正しさや経験的な正しさとは異なる独特の合理性を有する「概念連関」として捉えられるだろう．規範的な概念連関は，テクストによる行為や活動の理解可能性を解明するにあたって，分析の手がかりになるのである．

## 3　CAからの批判への応答

ただし，テクストデータを用いるEMに対しては，CAの立場からの批判もしばしばなされてきた．特に「成員カテゴリー化装置」（Sacks 1972）のアイデアを用いた分析への批判を行う中で，そもそもテクストデータを用いることの問題点が指摘されてきた．批判の主要な論点は，会話と異なりテクストデータの分析においては，受け手の反応を見ることができないため，分析の正しさが確保できないというものだ（串田ほか 2017: 257）．たとえばE. Schegloff（2007）は，先述のSacks（1972）の「赤ちゃんが泣いたの．ママが抱っこしたの」という文章の分析について次のように述べている．

> 文字データから出発しているため，ここでのSacksは，彼の分析の目標かつ資源であるところの，次の順番で示される共参与者の理解に関する資源を欠いている．そのため事実上彼は，論文の主たる部分がその基盤を再構成しようとする理解を規定してしまっている．（Schegloff 2007: 465）

「赤ちゃんが泣いたの．ママが抱っこしたの」が会話中の発話であれば，次の発話順番で別の参与者が何か述べるかもしれない．その場合当の発話は，前の発話の意味をどのように理解したのかを示す点で分析者による分析の資源となりうる．しかし，ここでの分析対象のテクストに対する反応は記されていない．したがって分析者は，当の文章の理解可能性に関する分析の資源を欠いており，その代わりに誰しもがこのように理解するはずだという自身の前提のもとで，それがいかにして可能かを分析することになる．

このように，テクストの分析は，テクストに対する他の参与者の理解を分析の資源として利用できないため，不完全で正しさを確保できないものになってしまうという批判がある．本節ではこの批判に応答し，EM の立場からのテクストの分析可能性を擁護し，前節で示した分析方針の有効性を改めて述べる．

まず確認しておきたいのは，テクストであっても，それを他の人々がいかにして理解したかを示す資源は手に入りうることだ．分析対象がテクストデータか否かという問題と，それに対する受け手の反応が見られるか否かという問題は，区別可能である．たとえばウェブ上の掲示板やチャットにおいては，あるテクストに対する自らの理解を他の参与者が示しつつ同調あるいは反論することはよくある．また，書籍に対する書評なども，あるテクストに対する他の人々の理解を示すテクストであり，分析者はそれをデータとして利用できる．書き手がテクストを書き，読み手がそれに対する自らの理解を示す新たなテクストを書くことは社会生活の一部を成しており，分析者はあるテクストに対する理解を示す別のテクストを手に入れ，分析の資源として参照することが可能である．

もちろん他方で，あるテクストに関して受け手の反応を示す別のテクストがない場合も存在するだろう．しかしそのことは，当のテクストの分析不可能性を意味しない．なぜなら，そもそも「受け手」の反応は分析の根拠として絶対的なものたりえないからだ．確かに CA においては，ある発話がいかなる行為であるかを分析するにあたって，次の順番さらにはそれ以降の順番の発話において示される当の発話への理解が重視される．しかしそのことは，ある発話の行為としての理解可能性に関する分析者の分析の正しさが，その後の順番における会話参与者の発話に示された理解との同一性に依存することを意味しない．ある発話の理解の「正解」は受け手の理解であり，分析者はそれと合致しているか否かによって自らの分析の正しさを示すというように考えてしまえば，「誤解」という概念の使用も困難になってしまう．しかし実際には，会話の中ではしばしば誤解が生じるし，Schegloff（1992）自身も受け手の誤解とその修復・訂正に関わる現象を精緻に分析している．

むしろ，発話の行為としての理解可能性をめぐる分析については，次のように考えた方がよいだろう．まず，ある発話の行為や活動としての理解可能性は，受け手がそれに対する理解を示す以前に，その発話の会話上の位置とそこで使用される語句や表現に基づいて成立している．そして会話分析者もまた，社会成員としての自然な発話の理解を前提に，そうした理解がいかなる概念連関や常識的知識に基づい

て可能になっているのかを分析している（Coulter 1983）．そのとき受け手の反応は，発話に対する分析者の自然な理解を反省する際に役立つが，ある発話がいかなる行為や活動として理解可能なのかに関する分析の正しさを保証するものにはなりえない．

このような考え方は，会話における次の順番やそれ以降の順番に相当するテクスト，すなわち受け手の反応を示すテクストがないテクストを分析する際にも有効である．すでに論じたように，テクストは書き手によって特定の理解へと方向づけられた形で組織されており，読み手はそれに制限されながらテクストを理解することになる．このようなテクストを活動として組織する方法やその理解可能性は，受け手の反応を示すデータに依存しないかたちで，当のテクストにおいて用いられている概念連関を分析することで解明できる．

すなわち，受け手の反応を見ることができないという理由に基づくテクストデータの分析への批判に対し，本稿は次の立場をとる．まず，テクストに関しても受け手の反応を示す別のテクストデータが入手可能な場合があり，それは分析の際に参照可能である．さらに，より重要なのは，そうしたデータがない場合にも，テクストデータの EM 研究が可能であることだ．社会生活における様々なテクストデータを分析の射程から外さないためには，受け手の反応を示す資料がないテクストをも分析可能な方針が要請される．その際には，個々のテクストで用いられている概念連関を分析し，当のテクストがいかなる活動としてデザインされ理解可能になっているかを解明するという前節で述べた方針が有効になるのである．

## 4　テクストの参与枠組とインターフェイス

ここまでで，「概念分析の社会学」として EM を捉える立場を参照しつつ，会話と一定程度共通の仕方でテクストも分析できることを論じてきた．さらに前節の「受け手」をめぐる議論を踏まえれば，書き手がその読まれ方に志向しデザインしたテクストが，実際の読み手にどのように読まれ，その読み手が当のテクストへの理解を示す新たなテクストをどのように書くのか，すなわち書き手と読み手のテクストへの参与のあり方の解明が興味深い課題として浮上する．そこで本節では，会話への参与をめぐる既存研究を踏まえた上でテクストの参与枠組の解明という課題について論じ，それに取り組む際にテクストを書く／読む際のインターフェイスへの着目が重要だと論じる．それを通じて，テクストデータを用いる EM の課題と方針を，CA との差異に留意しつつ提示する．

EMCA 研究とも関連が深い E. Goffman（1981: 137）は「ある人がこの［今なされている］発話に対して持つ関係をその人の当の発話に対する『参与地位』と，また当該の集まりの全員が当の発話に対して持つ関係をその発話時点における『参与枠組』と，呼ぶことができる」と述べている．また彼は，会話の話し手以外の人々は受け手か非受け手かに単純に二分されるのではなく，より複雑な参与枠組が生じ

ていることに注意を促している．たとえば話し手によって受け手として承認された参与者とそうでない参与者が区別できることや，話し手によって承認されていない参与者の間でも，話し手に気づかれないままに意図的に盗み聞きしている人，話し手に気づかれないままふと発話が耳に入った人，話し手に存在が気づかれている傍観者（傍聴者）など様々な区別ができるとされる．

この参与枠組のアイデアは，CA 研究者により批判的に検討されながら，経験的研究の道筋を開くものとして扱われてきた．西阪仰（2001: 38-40）は，第 1 に上記のような受け手の参与地位の分類がいかなる種類の相互行為においても常にレリバントとは言えないこと，第 2 に特定の相互行為において様々な参与地位がどのような発話や視線や身体配置・動作の組織によって割り当てられ，参与枠組がその場で成立しているのかが問われていないことを批判する．同様の批判は，C. Goodwin and M. Goodwin（2004）によってもなされている．これらの批判は，参与者自身がその都度の文脈や利用可能な資源の下で会話に参与する仕方を分析することの重要性を示している．そしてこの方針は，テクストの参与枠組を解明するにあたっても有益である[3)]．

では，書き手（や読み手）によるテクストの参与枠組の構成の方法を分析するにあたって，どのような着目点が有効だろうか．会話の参与者が参与枠組を構成する方法や資源としては，西阪（2001）の議論が示すように，発話自体のデザインに加え視線や身振りがあり，これらは分析の着目点となる．それに対してテクストについては，文章自体のデザインが重要であることに加えて，テクストを書く／読む際のインターフェイスが参与枠組の構成にとって重要な役割を果たしており，分析の着目点となると考えられる．本稿で言う「インターフェイス」とは，書いているあるいは読んでいる当の文章・テクストがその上に表示される面であり，それ自体も可視的なものを指す．私たちはテクストを書く／読む際に，それが表示される各々のインターフェイスをも見て利用している（あるいはそうせざるをえない）のであり，それは書く／読む仕方の制約かつ資源となっている点で重要である．

この意味でのインターフェイスの具体例として，印刷された紙面，文書作成／閲覧ソフトの画面，ウェブサイトの画面などが挙げられる．また個々の紙面やウェブサイトのフォーマットは様々であり，それぞれインターフェイスとして異なると言える．また，同じテクストでも，書く際と読む際のインターフェイスが異なる場合もある．ウェブサイトを例にとれば，テクストを書き込む際のインターフェイスとテクストを読む際のそれが異なる場合がある．また学術誌の論文というテクストに関しては，書く際のインターフェイスは特定の文書作成ソフトの画面であるのに対し，読む際のそれは別の仕方でレイアウトされた誌面や文書閲覧ソフトの画面であったりする．テクストの書き手は，テクストを書く際のインターフェイスを利用しかつそれに制約され，また書いたテクストが読まれる際のインターフェイスを想定し，テクストを書くことになる．

インターフェイスという制約と資源の中で，書き手はテクストを例えば独白とし

て，または特定個人に宛てて，あるいは不特定多数に宛てて，さらには異なる種類の読み手に同時に宛てるなど様々な形で，テクストの参与枠組を構成しうる．読み手もまたテクストに参与するにあたって，宛てられている特定個人として読む場合もあれば，直接的に宛てられてはいないが読むことを許されている不特定多数の一人として読む場合もあるだろう．さらに読み手がそのテクストに言及する別のテクストを書く際には，書く際のインターフェイスの下で読み手から書き手へと参与の仕方を変え，新たにテクストをめぐる参与枠組を構成することになる．

以上を踏まえ，本稿が示すテクストデータを用いる EM の課題と分析方針について，CA との共通点と差異を踏まえて整理しておきたい．まず，テクストデータを用いる EM は，書き手がテクストをデザインし特定の活動を行う方法を，またその際に書き手と読み手がテクストの参与枠組を形成する方法を解明することを目指す．この課題は，会話の参与者が発話をデザインし特定の活動を行う方法について，また参与者たちが参与枠組を形成する方法について明らかにするという CA 的課題と共通する部分がある．他方で，この課題に取り組む際の分析方針に関して，テクストデータを用いる EM には独自の着目点が要請される．それが，テクストを書く／読む際にテクストがその上に表示される面であり，それ自体も可視的なものとしてのインターフェイスである．テクストの書き手や読み手にとって，インターフェイスは実践のための資源かつ制約となっている．分析においてそれに着目することは，テクストの EM にとって有益な方法論的視座として位置付けられる．

## 5 分　析

本節では具体的分析を提示し，それを踏まえてテクストデータを用いる EM について本稿が示した方法論の意義を示す．特に，テクストの参与枠組を形成する書き手の方法が，テクストを特定の活動としてデザインする方法と密接に結びついており，それゆえ参与枠組形成の方法の分析はテクストの理解可能性の解明に寄与すること，またその分析の際にテクストを書く／読む際のインターフェイスへの着目が有効であることを例証する．

分析対象は，Amazon.co.jp の商品レビューである．ウェブサイトで商品のレビューを読み，書くことは，今や私たちの日常生活の一部になっている．また，取り上げるレビューには，別のユーザーからのコメントも付され，そこではテクストの読み手が新たな書き手となっていた点で，参与枠組の解明という観点から興味深い（ただしレビューへのコメントは現在廃止されており，このデータに関してはコメントの分析部分で詳述する）．

以下は，イギリスのゾンビ映画かつコメディ映画『ショーン・オブ・ザ・デッド』のレビューである（Amazon.co.jp 2014）．引用者は空白行を詰め，［ ］で補足を記している．

★☆☆☆☆　買わなければよかった［タイトル］
2014年2月16日に日本でレビュー済み［レビュー日時］
Amazonで購入［レビュワーの購入情報］
映画ファン．ゾンビ映画ファンです．
この作品は恐い訳でもなく，笑える訳でもなく，ただただ身勝手な登場人物に苛立ちを覚えます．
皆で助け合って生き延びようという時に，電話に出て大声で話したり，勝手にはぐれて噛まれたり，その上で涙の別れのシーンなんて見せられても全く共感出来ません．
映画を見ている途中に，ディスクを取り出して捨ててしまおうかと思いました．
それほど苛立つ映画です．
真面目にやって欲しい．
コメディにもなってない．

同サイトでは，評価を示す星の数とタイトルがまず提示され，その下にレビュー本文が提示される．レビューを書く際のインターフェイスとしての入力フォーマットも星の数の記入→タイトル→本文の順番になっており，書き手は自身の他のレビューの読み手としての経験も踏まえ，その順番で記入内容が表示されることを想定してレビューを組み立てることになる．こうして書かれたレビューを読むインターフェイスの中で，最初に表示される星の数と「買わなければよかった」という後悔を示すタイトルは，低評価を行うレビューとして読み手がテクストを読むためのインストラクションになっている．また後にレビューを読みコメントを書く／読む際のインターフェイスについて論じる際にも言及するが，このインターフェイスは，読み手がレビューへのコメントの書き手として新たにテクストに参与し，そこで活動を行う際の制約かつ資源の一部にもなる．すなわちテクストを評価という活動として理解することを促すインターフェイスは，テクストの読み手が新たにコメントの書き手としてテクストに参与する際に，「評価への評価」を行うことを可能にする．

以下ではテクストにおける表現と概念の使用を分析し，書き手がテクストの参与枠組を構成しまたそのテクストを活動として組織する方法を明らかにする．より具体的には，書き手が不特定多数の読み手に向けられた評価としてテクストを組み立てていることに焦点を当てる．

まずレビュー本文冒頭で書き手は「（ゾンビ）映画ファン」という表現を用いて自らをカテゴリー化している．一般的に，こうしたカテゴリーに属する人に対しては，（ゾンビ）映画に関する知識やそれを適切に論じる能力が期待される．このカテゴリー化を行うことで，書き手は自身の購入への後悔を，ゾンビ映画の知識やその評価能力に基づく正当性があるものとして示そうとしている．

次の「恐い訳でもなく，笑える訳でもなく」という表現は，それ自体が評価とい

う行為を構成している．「恐い」や「笑える」は，ホラー映画とコメディ映画という２つのジャンルの要素を併せ持つことの多いゾンビ映画の鑑賞において規範的に期待される経験である．この規範がある中で，それがないと記述することで，映画が規範から逸脱したものであることが示される．ジャンル概念と特定の感情や経験に関する概念の連関のもとで「恐い訳でもなく，笑える訳でもなく」という記述が評価として理解可能になる．

また書き手は映画内のある局面を「皆で助け合って生き延びようという時」と表現することで，その場面は緊迫したものであるべきで，登場人物は互いに協力すべきだという理解を示している．しかし，それに続いて「電話に出て大声で話したり」「勝手にはぐれて噛まれたり」などの表現を用いて登場人物の行為を記述することで，彼らが場面の規範的期待に反する行為に終始していることを提示している．この場面の規範とそれに従うべき主要な登場人物の行為との非一貫性は，映画の質の低さの根拠として理解できる．加えて，「涙の別れのシーン」という表現を用いて，さらなる場面の非一貫的な遷移を記述している．これらの表現を選択し，どのような場面で誰が何を行っているかを記述することで，書き手は映画に対して低評価を与えそれを正当化しているのである．

なおこれらの場面や行為をめぐる表現の選択は，書き手が映画を未鑑賞の人々を読み手として想定していることを示しているように思われる．Sacks and Schegloff（1979）は会話における人物指示について，話し手は聞き手に認識可能な表現を優先的に選択することを明らかにした．ある人物を指示する表現は，苗字，フルネーム，代名詞，職業など様々にありうるが，話し手は聞き手にとって誰が指示されているかが理解可能な表現を優先的に選択する．これを踏まえると，書き手が何かを指示する際の表現の選択は，指示される人物や事物に対する受け手の知識をめぐる書き手の想定を示すと考えられる．レビューの書き手が登場人物を具体的な人名で指示せず，映画内場面についても具体的な詳細なしに一般的な表現で描写していることは，書き手が当該映画を未鑑賞でその内容に関する知識を持たない読み手にも理解できるように，テクストをデザインしていることを示している．

続いて「映画を見ている途中に，ディスクを取り出して捨ててしまおうかと思った」という意思を示す表現が用いられている．この表現は次の行の「それほど苛立つ映画です」という不満の提示の資源となっている．実際にはディスクを捨てていないにせよ，捨てようとする強い意思があったことをこの表現により強調することで，自らの不満の強さを提示しているのである．

さらに，テクストの参与枠組の構成という観点から一層注目に値するのは，上記レビューの最後の２行（「真面目にやって欲しい．コメディにもなってない」）がそれまでの敬体と異なり常体で記されていることだ．こうした敬体と常体という文章デザインの区別は，書き手がテクストに参与するやり方の差異に対応していると考えられる．一方で，レビューの最初の７行で書き手は，自らの後悔を示し作品への低評価を正当化しているが，これが常体ではなく敬体で記されていることは，それ

が独白ではなく他者に向けられていること，とりわけ一定の敬意や配慮を示す必要があるような不特定多数の読み手に向けられていることを示している．他方で，レビューの最後の2行で常体を選択することによって，書き手は読み手に直接的に向けるというよりも独白の形で評価を提示している．「真面目にやって欲しい」は自らの不満の表現として理解でき，「コメディにもなってない」は作品に関する評価を改めて独白しているものと理解できる．書き手は，不特定の読み手を想定した敬体による作品評価と常体の独白による不満の表明とを使い分けており，こうした使い分けに基づきテクストの参与枠組を構成することは，書き手がテクストを通じてレビュー（低評価）という活動を行うための方法になっているのである．

次に，このレビューに付されたコメントを分析する．そのために，レビューを読みコメントを書く／読む際のインターフェイスを検討する．まず，先述したように，星の数，タイトル，本文という順番でテクストが表示されるインターフェイスは，当のテクストを評価という活動として読むことを促す．このことと，以下で示すレビューを読む／コメントを書く際のインターフェイスが相まって，レビューの読み手が新たにコメントの書き手となる形でテクストに参与し，その際にコメントを「評価への評価」としてデザインすることを可能にする．なお，2022年現在レビューへのコメント欄は廃止されているが，2020年7月19日に著者が取得した上記レビューへのコメントによれば[4]，同時点でコメントの日付は「3年前」であり，2016年7月20日から2017年7月19日までの時期に書かれたものだとわかる．Amazonでレビューを読みそれに反応する際のインターフェイスは常に改変されているが，そのコメントが書かれた時期のそれは，図1のようにコメントを書き込めるだけでなくレビューへの賛同あるいは批判を「はい」「いいえ」ボタンによって示せるものであった．

**コメント　49人のお客様がこれが役に立ったと考えています．このレビューは参考になりましたか？　はい　いいえ**

**図1　コメントが書かれた当時のアマゾンレビュー下部の表示例[5]**

このレビューを読む／コメントを書く際のインターフェイスは，以下の理由で，レビューに批判的な読み手をレビューへの低評価を行うコメントの書き手になることへと促すと考えられる．重要なのは，「このレビューは参考になりましたか?」に対して「はい」ボタンを押したレビューへの賛同者数は「X人のお客様がこれが役に立ったと考えています」と可視化されるのに対して，「いいえ」を押した人数すなわちレビューへの反対者数は数値として可視化されない点だ．そのため，レビューにおける評価への批判的評価を可視化するためには，「いいえ」ボタンを押すだけでは不十分であり，新たにコメントの書き手としてテクストに参与するしかない．このレビューを読む／コメントを書くインターフェイスに制約されそれを利用する形で，読み手はレビューという評価に対する批判的評価を行うコメントの書き手になるのである．

さらにコメントを読むインターフェイスとして，コメントはレビューの下に表示され，2つのテクストが同時に画面に並び読めるようになっていた．書き手はこうしたコメントが読まれるインターフェイスを想定して，次のコメントを書いたと考えられる．

> 真面目な日本人には英国流のジョークが通じないといういい見本のようなレビューです．

このコメントにおいて，書き手はどのようにテクストの参与枠組を構成しテクストを活動として組織しているのか．まず書き手は「ジョークが通じない」という表現を用いて，レビューにおいて映画に低評価がなされていたことへの理解を示している．またレビュワーが自身を「(ソンビ) 映画ファン」とカテゴリー化していたのに対して，コメントの書き手はレビュワーを「日本人」と再カテゴリー化している．このようにレビュワーに直接的に呼びかけるのではなく，言わば第三者的にカテゴリー化することは，書き手が当該コメントをレビュワーのみならず他の読み手に向けても宛てるという形で，テクストの参与枠組を構成するための方法になっている．加えてコメントの書き手は当該映画に「英国流」という表現を与えている．このカテゴリーや表現の選択は，レビュワーが低評価を与えた理由を説明する資源となっている．つまり，低評価の理由は映画の質が悪かったからではなく，レビュワーが映画のジョークを理解できなかったからだというように，低評価の理由をレビュワーに帰属している．ここで「日本人」に規範的に結びつけられている概念は「真面目」であり，それゆえに「英国」という異文化圏のコメディは理解できないとされているのである．

また，先述したインターフェイスの下で，このコメントはレビューという評価に対する評価として書かれ読まれうるテクストになっているが，より具体的には皮肉という行為として理解可能である．コメントでは「真面目」や「いい」など，書き手の人格やレビューの質に関する肯定的評価ともとらえられるような表現が用いられている．しかし実際にはジョークを理解する能力のない人物としてレビュワーを位置づけたという文脈がある．それゆえに，これらの表現の使用により，レビューやレビュワー自体を否定的に評価することを通じた皮肉が展開されていると理解できる．

さらに，先述したこのテクストの参与枠組という点から興味深いのは，コメントの書き手が皮肉という行為を構成するにあたって，レビュワーという特定の読み手とその他の不特定多数の読み手にともにテクストを宛てていることだ．コメントの書き手は，コメントがレビューの直下に表示されるインターフェイスを踏まえ，レビューに関して「見本」という表現を用いることで，当該レビューが他の人によって見られる対象であることを明示している．書き手は，コメントが読まれる際のインターフェイスを利用し，レビュワーという特定個人とそれ以外の不特定多数の読

み手双方に向けたデザインを行う形でテクストの参与枠組を構成し，それを通じて皮肉という行為を達成しているのである．

以上の分析は，本稿が論じてきた方法論の意義を示している．まず，書き手がテクストの参与枠組を形成する方法は，テクストを特定の活動としてデザインする方法と密接に結びついている．具体的には，レビューの書き手は常体による独白を行うとともに敬体により不特定の読み手に宛てるという形でテクストの参与枠組を形成し，その中で映画内場面への規範的期待と登場人物の行為との非一貫性の記述や，強い意思を示す表現の使用などの方法を用いることによって，テクストを独白的な不満の提示と不特定の読み手に向けた評価の組み合わせからなるレビューという活動としてデザインしている．またコメントの書き手は，レビュワーという特定個人と他の不特定の読み手に同時に向けるという形でテクストの参与枠組を形成している．このように参与枠組を形成しながら，「日本人」と「英国流」という対照的なカテゴリー化や，「真面目」という肯定的にも捉えうる表現の使用を通じて，書き手は評価を行うレビュー自体への否定的評価を行い，コメントを皮肉としてデザインしているのである．この点で本稿の分析は，書き手がテクストの参与枠組を形成する方法の分析が，当のテクストの活動としての理解可能性の解明に寄与することを例証している．

また本稿の分析は，テクストの参与枠組を形成しテクストを活動としてデザインする方法の分析にとって，テクストを書く／読む際のインターフェイスとそれが書き手／読み手に与える制約と資源への着目の有効性を例証している．具体的には，レビューを読みコメントを書く際の当時のインターフェイスは，レビューに対して批判的な読み手をコメントの書き手になることへと誘導するものとなっており，またレビューとコメントが同一画面に並ぶ読む際のインターフェイスは，コメントの書き手がレビュワーという特定個人と不特定の読み手双方に宛てる形でテクストの参与枠組を形成し，皮肉を行うための資源として利用されていたのである．

## 6 結　論

テクストの書き手がいかにしてテクストをデザインし特定の活動を行うのか，また当の書き手やそれを読んだ新たな書き手がテクストをめぐりどのような参与枠組を形成するのかが，テクストデータを用いる EM にとって興味深い課題となる．その際，書き手がテクストを特定の活動としてデザインする方法は，書き手が当のテクストの参与枠組を形成する方法と密接に結びついているのであり，その点でテクストの参与枠組を形成する方法の分析は，当のテクストの活動としての理解可能性の解明に資する．こうした分析の着目点として有益なのが，書き手や読み手の実践の制約かつ資源となっている，テクストを書く／読む際のインターフェイスである．

本稿におけるテクストデータを用いる EM をめぐる議論においては，テクスト

の分析可能性をめぐるCAからの批判に応答した上で，Goffmanの参与枠組のアイデアに対するCAの批判的検討を参照することが重要だった．テクストデータを用いるEMをさらに進展させるためには，会話とテクストの共通点と差異に注意しつつ，様々な主題や現象をめぐって展開されているCAの豊かな議論を検討することが有益である．これは，M. Lynch（1993＝2012）などにより緊張関係が取り沙汰されることも多いEMとCAの関係について，その共通の側面に改めて目を向け再検討することにもつながるだろう．

さらにテクストデータを用いる社会学一般との関連について述べるならば，テクストが単に社会現象を描写しているのではなく，それ自体行為や活動を行っているという視点は，社会現象の表象としての信頼性の判断が困難なテクスト，例えば一部の歴史的・政治的なテクスト資料を分析する際にも有益だろう．またテクストがどのような読み手を想定して産出され，それをめぐってどのような参与枠組が生じているかに着目することは，複数のテクスト間の言及関係や関連性を，単にその内容的な類似性や差異のみを析出するのではない仕方で分析することを可能にする．それゆえここで示したテクストデータを用いるEMの方法論は，日常的なものから専門的なもの，さらには歴史的なものも含む様々なテクストデータを用いる社会学一般にとっても，参照に値すると考えられるのである．

［注］

1） 近年ではR. Anderson and W. Sharrock（2018）がスプレッドシート，戦略計画，コスト計算表など様々な種類のテクストを用いたEM研究を行っている．

2） なおLivingston（1995）は詩と批評に加え，イラスト，数列，パズル，写真にも言及している．

3） 本稿は，会話のみならずテクストにおいても参与者（書き手／読み手）の実践を通じて参与枠組が構成されると捉え，その具体的でローカルな詳細を分析・記述しようとする．近年CAにおいても，発話という聴覚的資源だけでなく視線やジェスチャーや身体配置などの視覚的（あるいは身体的）資源に注目した分析を行う流れがより顕著である（Mondada 2014）．本稿は，聴覚的資源以外の様々な資源に着目しテクストの参与枠組を分析するEM研究の方向性を論じる点で，こうしたEMCAの研究潮流に沿ったテクスト分析の重要性を示すものとしても位置付けられるだろう．

4） 当該のスクリーンショットは以下である．

**部長　3年前**

**真面目な日本人には英国流のジョークが通じないといういい見本のようなレビューです。**

**図2　レビューへのコメント（2020年7月19日取得）**

5） コメントが書かれた当時のインターフェイスを示すために2017年6月13日に著者が取得した別のamazonレビューのスクリーンショットを使用した．2022年現在「いいえ」ボタンは廃止され「役に立った」ボタン（「はい」ボタンに相当）のみになっている．

## ［文献］


Amazon.co.jp, 2014,「カスタマーレビュー」,（2020 年 7 月 19 日取得，https://www.amazon.co.jp/review/RTMB751KJU4XR/ref=cm_cr_srp_d_rdp_perm?ie=UTF8&ASIN=B00W1EOC9S）.

Anderson, R. and W. Sharrock, 2018, *Action at a Distance: Studies in the Practicalities of Executive Management*, London & New York：Routledge.

Coulter, J., 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London：Macmillan Press.（西阪仰訳，1998,『心の社会的構成――ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社.）

――――, 1983,“Contingent and *A Priori* Structures in Sequential Analysis,”*Human Studies*, 6：361–76.

園康晃，2013,「『おたく』の概念分析――雑誌における『おたく』の使用の初期事例に着目して」『ソシオロゴス』37：45–64.

Eglin, P. and S. Hester, 2003, *The Montreal Massacre: A Story of Membership Categorization Analysis*, Waterloo：Wilfrid Laurier University Press.

Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, N.J.：Prentice-Hall.

Goffman, E., 1981, *Forms of Talk*, Philadelphia：University of Pennsylvania Press.

Goodwin, C. and M. Goodwin, 2004,“Participation,”A. Duranti ed., *A Companion to Linguistic Anthropology*, Malden：Blackwell, 222–44.

河村賢，2013,「テロリズム研究における宗教的動機の概念分析――『新しいテロリズム』論争を事例として」『ソシオロゴス』37：1–19.

小宮友根，2011,『実践の中のジェンダー――法システムの社会学的記述』新曜社.

是永論，2017,『見ること・聞くことのデザイン――メディア理解の相互行為分析』新曜社.

串田秀也・平本毅・林誠，2017,『会話分析入門』勁草書房.

Law, J. and M. Lynch, 1988,“Lists, Field Guides, and the Descriptive Organization of Seeing：Birdwatching as an Exemplary Observational Activity,”*Human Studies*, 11(2/3)：271–303.

Livingston, E., 1995, *An Anthropology of Reading*, Bloomington and Indianapolis：Indiana University Press.

Lynch, M., 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, New York：Cambridge University Press.（水川喜文・中村和夫監訳，2012,『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房.）

前田泰樹，2008,『心の文法――医療実践の社会学』新曜社.

Mondada, L., 2014,“The Local Constitution of Multimodal Resources for Social Interaction,”*Journal of Pragmatics*, 65：137–56.

西阪仰，2001,『心と行為――エスノメソドロジーの視点』岩波書店.

小川豊武，2016,「若者はいかにしてニュースになるのか」川崎賢一・浅野智彦編『〈若者〉の溶解』勁草書房，53–84.

岡沢亮，2017,「図画のわいせつ性をめぐる裁判の恣意性再考」『現代社会学理論研究』11：29–41.

Psathas, G., 1979,“Organizational Features of Direction Maps,”G. Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York：Irvington, 203–26.

Sacks, H., 1972,“On the Analyzability of Stories by Children,”J. Gumperz and D. Hymes eds., *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York：Holt, Reinhart and Winston, 329–45.

Sacks, H. and E. Schegloff, 1979, “Two Preferences in the Organization of Reference to Persons and Their Interaction,” G. Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington, 15–21.

酒井信一郎，2010,「メディア・テクストのネットワークにおける成員カテゴリー化の実践」『マス・コミュニケーション研究』77: 243–59.

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編，2009,『概念分析の社会学――社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.

Schegloff, E., 1992, “Repair after Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation,” *American Journal of Sociology*, 97(5): 1295–345.

————, 2007, “A Tutorial on Membership Categorization,” *Journal of Pragmatics*, 39(3): 462–82.

Sharrock, W. and N. Ikeya, 2000, “Instructional Matter: Readable Properties of an Introductory Text in Matrix Algebra,” S. Hester and D. Francis eds., *Local Educational Order: Ethnomethodological Studies of Knowledge in Action*, Amsterdam: John Benjamins, 271–88.

Watson, R., 2009, *Analysing Practical and Professional Texts: A Naturalistic Approach*, Farnham: Ashgate.

山﨑沙織，2015,「『読めない母親』として集うことの分析――長野県 PTA 母親文庫の 1960 年代から」『社会学評論』66(1): 105–22.

（原稿受付　2020.9.20　掲載決定　2022.1.12）

# Ethnomethodology and Text Data

*OKAZAWA, Ryo*
*Meiji Gakuin University*
boiledend0320@gmail.com

Ethnomethodology has mainly focused on analyzing audio or video data of talk-in-interaction. Recently, however, ethnomethodological studies analyzing text data are gaining increasing attention in Japan. This paper aims to develop methodological arguments to provide goals, methods, and perspectives of ethnomethodological studies of text data. First, based on previous ethnomethodological studies, this paper presents a fundamental principle of ethnomethodological studies of text data. Instead of treating texts as mere representations of social phenomena or resources for analysis, ethnomethodology analyzes them in their own right and elucidates how they are made understandable as particular actions. Second, responding to conversation analysts' criticism regarding the difficulty of using co-participants' understandings as analytic resources in texts, this paper defends the ethnomethodological analyzability of text data. Third, building upon Goffman's idea of participation framework and conversation analysts' critical examination of it, this paper states that it is a crucial task to elucidate how writers and readers form participation frameworks around texts. In addressing this issue, I argue for the importance of paying attention to interfaces as both constraints and resources for the practice of writing and reading texts. Fourth, this paper analyzes an Amazon.co.jp review text of an English comedy film and a comment on the review, thereby showing that an analysis of how writers/readers form participation frameworks around texts contributes to the elucidation of the intelligibility of the texts as actions. Finally, my methodological argument contributes to the reconsideration of the relationship between ethnomethodology and conversation analysis, focusing not only on tensions but also on possibilities of collaborations.

Key words: ethnomethodology, conversation analysis, text

(Received Sep. 20, 2020 / Accepted Jan. 12, 2022)